



学校名:野田市立中央小学校

氏名: 今井 清人

[担当教科: 小学校全教科]

- 実践教科等: 総合的な学習の時間
- 時間数 : 4時間
- 対象生徒 : 小学校6年生
- 対象人数 : 37人

1 単元名

世界に目を向けて

2 単元の目標

- ・モンゴルの人々や、生活、文化について知り、世界の国々への興味・関心をもつ。
(進んで参加する態度)
- ・モンゴルで活躍する日本人について学び、世界と日本のつながりに気づき、互いに助け合う共生の心を培う。(つながりを尊重する態度)
- ・モンゴルをはじめ、世界が抱える問題について知り、自分にできることはないか考えることができる。
(他者と協力する態度)

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・モンゴルと日本の生活を比較し、多様な文化や価値観があることに気づく。【多様性】
- ・モンゴルと日本のつながりに気づき、共生の大切さを学ぶ。【連携性】
- ・モンゴルが抱える問題について知り、自分にできることを考えたり、自分の生き方を見つめたりすることができる。【責任性】

4 単元の指導について

(1)教材観

6年生の子どもたちは小学校卒業を目前に、中学進学に向けての準備やこれからの自分の将来と向き合う大切な時期を迎えている。総合的な学習の時間の中では、キャリア教育を実践し、自分は何を求めて働くのか、何のために学ぶのか、どのように生きるのか等、自己と働くこととを関連づけて考えるようにしている。

今回、JICA の教師海外研修でモンゴルを訪れ、厳しい環境の異国の地で世界の国々のために働く日本人の様子を視察することができた。日本人の若者が、現地の状況に苦勞しながらも、やりがいを持ち工夫して活動が続けている姿は、自己と働くことを学ぶキャリア教育の教材に適していると考えた。

また、世界に目を向け視野を広げながら、一步深く自分の生き方を見つめてもらいたい。世界には、多様な文化や価値観を持った人々がいること、そしてそういった自分とは異なる他者を受け入れ、共に協力し合って生きていくことの大切さをこの単元を通して実感してもらいたい。

(2)児童観

本校の6学年児童は、新しい知識を得ることについて、素直に喜ぶ姿が多く見られる。外国人講師が来ての週1回の外国語活動の時間をとても楽しみにしており、異文化への興味は高い。外国語活動の時間には、英語でのコミュニケーションを積極的に楽しんでいる様子も窺える。しかし、実際の生活の中で、世界に目を向けることはほとんどなく、知っている国もほとんど挙げられない児童も見られた。

モンゴルについては、知っている児童がほとんどいない状態であった。モンゴル相撲やスーホの白い馬、ゲル等を知っている児童がいるかと思われたが、現在の横綱である「白鵬」や「日馬富士」がモンゴル人であることも知らない状況であった。数名、遊牧民や草原が広がる国というイメージを持っている程度であった。

本単元を通して、児童の視野を広げ、世界の国々の状況について興味を持たせ、日本と世界の国々がどのようにつながっているのかを理解させたい。また、世界で活躍する日本人がいることを知り、自己

の生き方を見つめ直す機会としたい。

(3)指導観

日本に対して好意的な国であるモンゴルの現状を知り、モンゴルをはじめとする世界の国々と仲よくするにはどうすればよいのかを考えさせたい。そのためには、モンゴルを身近に感じてもらうため、日本の生活と比べながらモンゴルの生活について学んでいく。特に、同年代の子どもたちの通う学校生活の中で同じような所と違う所を見つけさせる。また、興味を持っていることの大きな違いとして、モンゴルの子どもたちが日本に非常に興味を持っていることに気づかせたい。それに対して、自分たちはモンゴルについてほとんど知らない状態である。そこで、モンゴルをはじめ、世界の国々についてもっと興味を持たせ、積極的に関わっていかうとする態度を育てたい。(第1次)

日本からモンゴルへの支援について学ぶことを通して、上から目線の一方的な支援ではないことに気づかせたい。現地の人と協力して共に汗を流しての支援があったり、他国と協力しての支援があったりと、共生を常に意識しての支援が行われている。また、そういった支援が有効に行うためにも、相手の国について知ることが重要になってくる。普段どんな生活をしているか。どんなことに困っているのか。どんなことができるか。相手のことを知ることが国際理解へとつながるのである。(第2次)

世界で活躍する日本人がいることを知り、自分も世界の国々のためにできることはないか、自分を見つめ直す機会としたい。海外青年協力隊として、モンゴルのために働く日本人を紹介する。日本とは違う厳しい環境の中での苦労や、それを補うための工夫、つらい中でもやり抜ける心の支えであるやりがいを考えさせる。(第3次)

5 評価基準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
評価基準	モンゴルの人々の生活を通して世界の多様な文化や国の様子について関心を持ち、意欲的に捉えようとする。	モンゴルや国際社会における課題について多面的・多角的に考察し、自分にできることはないか考えることができる。	モンゴルの人々の生活や国の様子に関する資料から、必要な情報を読み取ることができる。	モンゴルや国際社会における様々な課題について理解し、JICAの支援や国際協力についての知識を身に付けている。
評価方法	学習の様子・発言 授業の感想 話し合いの参加	ワークシートの記述 発言の内容 授業の感想	ワークシートの記述	ワークシートの記述 発言の内容

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	モンゴルってどんな国	・モンゴルの人々や、生活、文化について知り、世界の国々への興味・関心をもつ。	・モンゴルについて知っていることを挙げる。 ・モンゴルクイズ(国旗、遊牧民の生活、学校の様子などを紹介) ・モンゴルの子どもたちの生活と自分たちの生活を比べる。 ・モンゴルなど海外の国と仲よくするには、どうすればよいか考える。
2	日本からモンゴルへの支援って何をしているの？	・モンゴルと日本の関係を理解し、共生の大切さを感じることができる。	・日本からお金を出して、学校や新空港を建設したり、家畜の感染症を予防したりする等、様々な支援を行っていることを知る。 ・日本からの一方的な支援ではなく、相手国やその他の国とも協力しながら支援をしていることに気づかせる。 ・3つの支援の共通点から共生の大切さを感じる。
3	世界で活躍する	・モンゴルで活躍する日本	・フットランゲージで、モンゴルのゴミ事情を

	日本人 Part1	人について学び、世界と日本のつながりに気づき、互いに助け合う共生の心を培う。 ・モンゴルが抱える問題について知り、自分にできることを考え、自分の生き方を見つめることができる。	知る。 ・モンゴルの厳しいゴミ事情の中、環境教育に取り組む横山隊員の苦労、それを補う工夫した活動を知り、自己の生き方を見つめ直す。
4	世界で活躍する日本人 Part2	・モンゴルで活躍する日本人について学び、世界と日本のつながりに気づき、互いに助け合う共生の心を培う。 ・モンゴルが抱える問題について知り、自分にできることを考えたり、自分の生き方を見つめたりすることができる。	・厳しい環境の中でも、現地の特性を活かして工夫した活動続ける日本人について、自分と比べながら考えさせる。 ・世界中の人々のために、自分は何ができるのかを考える。

7 授業事例の紹介

小単元名【世界で活躍する日本人 Part1】

(1) 指導案

(ア)実施日時 11月27日(金)第2限

(イ)実施会場 6年3組教室

(ウ)本時の目標

世界で活躍する日本人の苦労や工夫、やりがいを知り、自分はどんなことができるか考えたり、自分の生き方を見つめ直したりすることができる。

(エ)指導のポイント

日本とは違う厳しい環境の中での苦労や、それを補うための工夫、つらい中でもやり抜ける心の支えであるやりがいを考えさせる。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 5分 展開 30分	学習課題提示 フォトランゲージ ・草原に落ちているごみは誰が捨てた物なのか話合う。	世界で活躍する日本人から、自分を見つめ直そう。 ・草原の写真から、気づいたことを発表する。  	ペア ペア 一斉	・気付いたことをワークシートに書かせ、隣同士で意見交換の時間を設ける。 ・びんや鉄くず等、様々なゴミが捨てられている様子を写真で見せる。	

まとめ 10分	写真よりモンゴルのゴミ事情を知る。	パワーポイントの資料を見ながら、教師の説明を聞く。	一斉	- モンゴルの遊牧民時代からの風習が関わっていることを押さえる。 - そんな中で、モンゴルの子どもたちに環境教育を行う横山隊員の苦勞を感じ取らせる。	モンゴルの厳しいゴミ事情の中、環境教育に取り組む横山隊員の苦勞やそれを補う工夫した活動を知ることができる。
	横山隊員の工夫した環境教育の取組を知る。	実際に行っている環境教育を同じように体験する。 	一斉	2択クイズ形式なので挙手させる等、全員での参加を促す。	
	- 横山隊員の取組を振り返る。 - 授業の感想	- ワークシートに横山隊員のすごいなと思うところを書く。 - 世界で活躍日本人を学んで自己の生き方についても触れて授業の感想を書く。 	一斉	自分の言葉で感想を書かせる。	

(2) 授業の振り返り

〈成果〉

- ・フォトランゲージから草原に落ちているゴミに目を向けさせたことで、モンゴルのゴミ問題へと自然とつながることができた。
- ・最初に示した課題「世界で活躍する日本人から、自分を見つめ直そう」を意識させたことで、隊員の苦勞や工夫から自分の生活を見つめ直したり、自分の将来を考えたりする活動へとスムーズに移行することができた。

〈課題〉

- ・パワーポイントを使用し、たくさんの写真等を見せ、実際の現地の様子を伝えるようにしたが、隊員のインタビューの動画があると、隊員の苦勞や工夫がより子どもたちに伝わったのではないかなと思う。
- ・最後に、自分を見つめ直した内容を、児童同士で交流する活動が取れるとよかった。

(3)使用教材

授業で使ったワークシート

世界で活躍する日本人から、自分を見つめ直そう。

年 月 日

草原に落ちているごみは、だれが捨てた物なのだろうか？（理由も考えよう。）

横山隊員の「すごいな」と思うところを書きましょう。

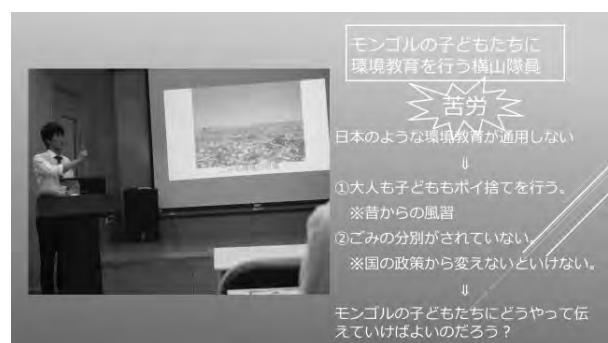
自分の意見について考えて、今日の授業の感想を書いてください。

フォトランゲージで使った写真



児童の意見

- ・ 家がない。
- ・ 人の気配がない。
- ・ 山にも木がない。
- ・ 車が通った跡がある。
- ・ ごみが落ちている。



(4)参考資料等

特になし

8 単元をととした児童の反応/変化

児童の感想には以下のようなものがあつた。

第1次「モンゴルや他の国々の人たちと仲良くするためにはどうしたらよいだろう。」

- ・モンゴルや他の国に興味を持ち、知ろうとすればよい。
- ・日本の事をもっと教えてあげたらよい。
- ・いろいろな国の人たちと話をするために、英語をたくさん勉強したい。

第2次「日本とモンゴルの関係を考えよう。」

- ・日本だけでなく、他の国とも協力して、モンゴルのことを支援していた。将来は、どの国も仲良く助け合っていけたらいいと思った。
- ・モンゴルのために日本が支援しているというのがすごいなと思った。自分だけでなく、世界に目を向けなければいけないと感じた。
- ・日本がモンゴルにいろいろな支援をしていることを初めて知った。モンゴルの将来がよくなればといいと

思った。

第3次「自分の生き方についてもふれて、感想を書こう。」

- ・あきらめずに環境改善にむけて頑張っている横山隊員は、すごい。自分も、どんなことがあってもあきらめずに、人のためになることをやれるようになりたいと思った。
- ・私は、未来のことを考えて、今頑張って勉強して、医療で他の国の苦しんでいる人たちを助けてあげたいです。この授業をして、もっと未来についてちゃんと考えて活動したいと思いました。
- ・横山隊員のように、将来のことなどを考えて、何か行動してみようと思いました。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

教師海外研修への参加前には、日本とモンゴルとの関係を含めて日本の国際協力の在り方についての理解は浅く、授業展開にも工夫はなかった。研修先では、日本からの支援の現場を実際に目にすることができた。学校建設や空港建設等の物的支援や青年海外協力隊等の人的支援と様々な支援が行われていることを知ることができた。特に、厳しい環境の中、他国のために懸命に働く青年海外協力隊の活動を6年生の子どもたちにキャリア教育の一環として紹介し、自己の生き方を見つめ直して欲しいと考えるようになった。

○本単元におけるPDCAサイクル

段階	項目
P計画	単元の目標や授業のねらいを設定した。 学習指導計画を作成した。 授業の準備として、モンゴルの基本情報、青年海外協力隊の活動の情報を収集した。
D実施	ねらいに基づいて、モンゴルで得た資料を教材に授業を実施した。 ワークシートに考えを記入させた。
C検証	ワークシートや授業中の発言をもとに評価を行う。 成果 ・モンゴルをはじめとする世界の国々の人たちとどのようにして仲良くしていくのかという問いかけに、今自分たちができることを考えたり、世界の国々に興味を持つことの大切さを考えたりする児童が多かった。 ・厳しい環境の中で活動する青年海外協力隊員の様子から、自分の生活を振り返ったり、自己の将来の生き方を考えるきっかけとなったりすることができた。 課題 ・青年海外協力隊の活動への感想は書けているが、自分の生活への振り返りや生き方の見直しまで書けない児童がいた。 ・児童同士が意見を交わし合う場面をもっと持てるとよかった。友だちの感じ方を知ること、自分の考えや振り返り方、将来への捉え方等が深まってくると考えられる。
A改善	・感想の記入前に、再度、「世界で活躍する日本人から自分を見つめ直す」という本時の課題を確認する必要がある。 ・ペアやグループで話し合ったりする等、学習形態を工夫しながら学習を進めていくようにする。

10 教師海外研修に参加して

今回、JICA教師海外研修に参加し、様々なプログラムの中で、現地の方や異国の地で活動する日本人の方と交流を持つことができた。様々な人たちの話を聞く中で、日を追うごとに、日本の子どもたちは大丈夫だろうかという感情が強くなった。

モンゴルの子どもたちが、日本に関心を持ち、日本語を勉強する児童がたくさんいる中、日本の子どもたちは、世界の国々に興味を持っているのだろうか。また、我々教師が、そういう子どもたちを育てるような環境を整えられているのだろうか。日本の子どもたちが世界に目を向けられるよう、まず私が見てきたモンゴルを紹介し、他国に興味を持たせたいと考えた。たくさんの方々と交流をすることができたので、モンゴルの子どもたちの学校や生活の様子から、また青年海外協力隊として活動する3人の日本人から、その他にも日本からの支援の様子やモンゴルの環境問題等、様々な切り口からモンゴルを紹介し、世界に目を向ける子どもたちを育てるための授業作りに取り組むことができた。